

---

# 狩る者と狩られる者の事情と憂鬱

kaito

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

狩る者と狩られる者の事情と憂鬱

### 【Nコード】

N6527J

### 【作者名】

kaito

### 【あらすじ】

『こんなはずじゃなかったのに、何この状況……………』

一人前の怨霊となるために最終実技試験である部屋に訪れた少女。部屋の主を殺して無事に怨霊となれるはずだったのだが

幽霊はもちろん妖怪や神様など、色々と癖のあるキャラが登場するホラー(?)コメディ&ラブストーリー目指して頑張っていきたいと思えますので、どうぞよろしく願います。

## こんなはずじゃなかった（前書き）

小説家になろうでは初投稿になります。

流血、グロテスクな表現がございます。

無いに等しい文章力と発想で作った作品ですが、よろしければご覧下さい。

こんなはずじゃなかった

『こんなはずじゃなかったのに、何この状況……………』

モノトーンの家具で統一された部屋の中、白いワンピース姿の少女はそんな事を思いながら、目の前にいる人物を恐る恐る覗き見た。ガラス板のローテーブルを挟んで対峙している男は見た目20代前半、髪と瞳は闇夜のように黒く、見ているだけで引きずり込まれそうになる。

視線を下げれば白のシャツに黒のジーンズといった、まるで部屋の一部であるかのような色合いの服装に身を包んでいることがわかった。

座っているので詳しくはわからないが、なかなか高身長であるのが伺い知れる。

顔も整っており、きっと普通の女性なら惚れる要素の塊である。

そう、普通の女性なら。

『っていうか、いい加減空気が重いよ……………』

彼女達がこの部屋に入って既に1時間、この状態になって30分が経過していた。

お互い無言のまま、時計の針の動く音をBGMにして過ごすにはかなり厳しい状態だ。

なんとかこの状況を打破しようと少女が口を開こうとした瞬間、その言葉は突然投げかけられた。

「仕方ない、今日からお前と同居するしかないな」

「……………え？」

話しかけられたことにも驚きだが、出てきた言葉の内容はその上をいくものであった。

『私と同居？……………いやいやいや！！何言ってるのよこの男！！』  
あまりの衝撃に開いた口が塞がらない様子の少女を見て、男は更に続けた。

「お前に俺は殺せない、俺にもお前は殺せない……………なら一緒に住むしか道はないだろ」

そう、少女がこの部屋に来た理由とは、目の前の男を殺すことになったのだ。

## 1時間前

『最終実技試験……………これさえ合格すれば、私も一人前になれるのね』

暗闇の広がる空間の中、少女は目の前にある隙間から中の様子を伺

ついていた。  
予定の時間まであと5分……少女は手に汗を握りながらその時を待っていた。

『大丈夫、向こうでやったシュミレーションではちゃんと首を捻り切れた……人形だったけど』一般人が聞いたらひかれること間違いない思考を巡らせながら、少女はターゲットと思われし人物を目で追っていた。

『……ッ！よし、時間だわ！』  
色々と考えを巡らせているうちに時間になり、少女は意を決して目の前にある隙間に右手をゆっくり差し入れた。

『登場する時は恐怖を煽るためにゆっくりと、ゆっくりと……』  
心の中でそう呟きながら、少女は隙間へと自身の身体を潜りこませていった。

その頃、机に向かってパソコンでデータ整理をしていた男は、急に部屋の空気が重くなった事に気がつき作業を中断した。気になって辺りを見回してみれば、自分の真後ろにある壁に先程までなかった黒点に目が止まる。  
しばらく見ていると、その黒点から女性のものと思わしき手が現れ、肩、頭、上半身と徐々に這い出てきて、あっという間にその全身を現した。

『……なんで無反応？え？もしかして怖くなかった？』

大抵の者ならこの異常事態に声を上げるなり倒れるなり、何らかのアクションを見せてもおかしくないのだが、目の前にいる男は全くの無反応で少女を見つめているだけであつた。

『ただ単に驚きすぎて固まっちゃっただけみたいね。まあいいわ、最初なんてきつとこんなもんよ』

幸いにして自身の長い黒髪が表情を隠してくれているので、相手に動揺は悟られていないと判断した少女は、おもむろに右手を前に突き出すと、まるでそこにある何かを握るかのように拳を結んでみせた。

『この人に怨みとかはないんだけど……まあ、私にとっては生きてること自体が怨みに繋がるのか……ハッ、いかんいかん！！割り切るのよ、ここで殺す事に戸惑ってたらこの先やってけないじゃない……ごめんなさい！！』

溢れ出した思考を打ち消すと少女は目を固く閉じ、突き出していた右手をおもむろに時計回りに数回回してみせた。

すると、あるうことが少女の前方に立っていた男の首が同じように回り出し、筋肉を引き千切り骨を砕く音を立てながら自身の身体との別れを遂げたのだつた。

千切れた頭は床に転がり、支えの無くなった首から下は重力に逆らうことなくその身体を沈めることになった。

頭のある箇所からは紅が吹き出し、2色で統一された部屋を鮮やかに染めていった。

『……………終わった』

緊張の糸が切れたのか、少女はその場に座り込み、先程自分が殺した男の遺体を呆然と眺めていた。

時間にして数秒程であつたらうか……………少女が初めての殺しによって芽生えた興奮と罪悪感との闘いを心の中できていると、静寂に包

まれた部屋に音が生まれた。

「まったく……最近の幽霊はこんなえげつない殺し方しか出来ないのか？後処理する奴等の立場も考えてみる」

「ッ！……だ、誰！？」

不意に発せられた言葉が自分にかけられたものだとなると、少女は部屋を見渡して声の人物を探した。

しかし、部屋の中には少女と遺体以外の姿はなく、また誰かが出ていった様子もない。

謎の声に少女が慌てふためく中、信じられないことが起こった。

それまで横たわっていた男の身体が突然上体を起こし、あろうことが床に転がる自身の頭を持ち上げたのだ。

「な、ななななんで！！え！？どうして！？」

「お前、明らかに実践経験が足りないみたいだな……残念ながら、お前じゃ俺を殺せないよ」

そう言ったのは、自分の身体に抱きかかえられている男の頭であった。

少女が啞然としてみている中で、男は呆れ顔をしながら自分の頭を元の位置に置いた……その瞬間、先程まで捻れてぐちゃぐちゃになっていた切口がほどけ、あろうことが千切れた部分同士がくつき、数秒で元の状態へと戻ったのである。

「ふう……あ、あ、なんか久々に神経繋ぐ作業やったせいか、少し違和感残ってんなあ」



「ああ、あああんた！！首が！！」

目の前で起こったことが信じられない様で、少女は震える身体で男を指さしながら問いかけた。

「おいおい、人を指さしちゃ駄目って習わなかったのか？これだから最近の若いヤツは……………」

「い、今はそんなこと！！ど、どうだっていいでしょ！！そ、それよりなんでアタシ死なないのよ！！」

ため息混じりに答えた男にツッコみつつ、少女はふと先輩幽霊から聞いた一言を思い出した。

#### 1ヶ月前

「いゝい新人、アタシ達怨霊って呼ばれてる連中は、普通の人間なら軽く殺せる程の力を持つてるけど、そんなアタシ達でも絶対に殺せない、それでいて絶対に逆らっちゃいけない存在ってのがいるんだよ！！」

その日、少女は先輩幽霊の指導の元、人間に見立てたダミー人形を使って殺しの練習をしていたのだが、ただ繰り返し返してるだけではつまらないとのことで、休憩がてら様々な話を聞いていた。

「はあ……………それは絶対に殺せないんですか？」

「無理だね！！妖怪課にいる『口裂け』んとこの次女も過去に遭遇したらしいんだけど、いくら殺しても死なない上に、そいつ反撃とばかりに妖怪殲滅用の銃で反撃してきたらしいよ！！」

「ええ！！あの窓口受け付けの口裂けさんがですか！？」  
少女が驚くのも無理はなく、『口裂け女』として一時期世間を騒がせた3姉妹はいずれも強者ばかりで、中でも好戦的な次女は多くの人間をその手で殺してきたらしく、当時の業務成績はトップだったと聞いていたからである。

ちなみに今は怨霊育成専門学校の窓口受け付けのマドンナとして、日々極上のスマイルで幽霊&妖怪男性の心を射止めていたりする。

「アタシも信じられないけど、本人の口から聞いたんだからホントなんだろうさ。他にも過去に何十……いや、何百って同胞がアイツらに狩りとられてるらしいよ。つまり！！会わないのが一番だろうけど、会っちゃったら全力で逃げることだよ、あの　からはね！！」

「……………死神」

「なんだ、ちゃんと知ってるじゃないか」

目の前の男……………死神の一言を聞いた瞬間、少女の全身からは今までにかいたことのない汗が吹き出していた。

自分が絶対に殺せない存在であり、向こうは自分を簡単に殺せるのだ。

おまけに怨念の力で目の前にいる男を標的にしてしまったため、少女は今死神に『取り憑いている』状態なのである。つまり、この男を殺さない限り少女は逃げる事が出来ないのだ。

『どどどどどどどどど……………死神は殺せないから取り憑きを解除出来

ないし、逃げないにしろ相手が私を生かしておくなんて絶対にあり得ないわ。おまけに、確か死神に狩られたら………」

「知ってるか、怨霊は死神に狩られたら必然的に地獄行き、しかも針山や釜茹で、引き裂きなんかのフルコースまで味わえるんだぜ………お得だろ？」

「全っつっつ然お得じゃないじゃない!!」

愉快そうな死神に対し、少女は今にも倒れそうなくらいに顔を青くしていた。

「まあこれも運命だと思っただ諦める!!しかし良かったな、俺ちよつど怨霊担当の死神なんだよ。これで俺が妖怪担当とかだったらわざわざ応援呼ばなきゃだったし、手間省けてラッキーだわ」

そう言うと、死神は机の引き出しをおもむろに引き、中から黒い物体を取り出した………言わずともな、怨霊専用の殲滅銃である。

「ひい!!」

「安心しろって、撃たれても痛くねえよ。まあ地獄に行ったら痛いじゃ済まされないけどな」

銃の存在にビクつく少女を尻目にそんなことを言うと、死神は弾を装填して銃口を突き付けてきた。

咄嗟に先程出てきた隙間から逃げようとするが、『取り憑き』の影響で部屋から出ることは叶わなかった。

「だから安心しろって、すぐ終わるから。天井のシミでも数えてるよ」

「そんなので気分が紛れるか!!ってか言い方がやらしいわよ!!」

少女がギャーギャー騒いでいるのを見て楽しんでるのか、死神は一向に引き金を引こうとしないでその様子を観察していた。

それから数分後、さすがに少女も成す術が無いと思ったのか、騒ぐのを止めて死神に正面から向き合う形をとった。

「おつ、もう思い残したことはないのか？」

「……………何それ嫌味？未練があるから怨霊になるんじゃない……………それに、こんな状況じゃどうにもならないし、騒ぐだけ無駄だって気付いたのよ。いつそのこと楽にしてちょうだい」仏頂面でそう答えた少女に対し、死神は最初驚いた表情をしていたが、一瞬にしてそれも笑顔に早変わりした。

「へえ、案外さっぱりした性格なんだな。嫌いじゃないぜ、お前みたいな女」

「……………死神になんか好かれたくないわよ」

死神の言葉に若干の照れ臭さを感じつつも、少女は素っ気なくそう返すと、目を瞑って引き金が引かれるのを待った。

さすがにこれ以上延ばす訳にもいかず、死神も銃を再び構え直すと、少女の心臓に狙いを定め、その引き金を引いた……………のだった。

「……………あれ？」

死神が指を掛けた引き金は幾ら引いても発砲せず、虚しく時が過ぎるのみであった。

「……………ねえ、まだなの？」  
さすがに耐えきれなくなり、少女が目を開いて目的の人物を見てみれば、死神は困った様子で此方を見つめていた。

「ああ、まさかとは思いが……………お前、今まで怨念で人を殺したことがある？」

「……………？私昨日まで怨霊育成専門学校通ってて、今日ようやく最終実技試験受けることになったから、今まで人殺したことなんてないわよ……………なんで？」  
若干の焦りが見られる死神に多少疑問を持ちつつも、少女は今までの自分の経緯を簡単に説明してみせた。  
すると死神は誰が見ても分かるくらい顔を青くし、その場に座りこんでしまった。

「……………マジかよ、こんな偶然あり得ねえって」

「いったいどうしたのよ？」  
明らかに動揺している死神に話しかけた少女は、その後に発せられた言葉に固まる結果となった。

「いいか、死神にも担当つてもんがあるんだ……………一つが死者の道先案内人。これは文字通り死んだ連中を死者の国まで送り届ける役割な」

人差し指を突き出して説明する死神の話に耳を傾けながら、少女は脳内で話の内容を整理しなから聞いていた。

「二つ目が怨霊担当殲滅人。これは俺の所属してるとこなんだけど、人間を殺して回ってる怨霊をこの銃で強制的に地獄に送りつける仕事のことだ。あ、ちなみに道先案内人は死んだ魂を運ぶだけだから

こついった武器は持ってないぞ」

右手に持った銃を見せながら話をする死神に対し、少女はまだ銃に対する警戒が解けていないのか、腰が退けた状態でなんとか踏ん張ってその場に座っていた。

「んで、三つ目が妖怪担当殲滅人。こつちはウチより相手にする対象がでかい場合が多いから、銃以外に鎌とか刀とかつていったの所持してんのが特徴な」

世の中の死神のイメージはこの妖怪担当殲滅人が元になってるのかもしれない、等と思いつながら、少女は続く言葉に耳を傾けていた。

「以上の三つが死神の仕事なんだけど………実はいずれの死神でもお前を狩れないんだよ」

「………なんで？アンタの話だと、私は怨霊担当殲滅人つてのに狩られるんじゃないの？」

目の前で困った顔をしながら腕組みをする死神に対し、少女は思ったことをそのまま口にしていった。

「俺達の仕事はあくまで人間を殺してる（……）霊を狩るのが仕事だ………で、お前は？」

「………殺してない」

「そう、つまりはお前は怨霊でありながら人間を殺してない綺麗な心の霊つてことになる………この銃は殺した霊の内なる闇を感知して相手を捕らえ地獄に送る。だから闇のないお前は撃てないんだよ」  
死神の説明を受け、ようやく少女は自分の置かれている状況を把握した。

怨霊である以上自分は怨霊担当殲滅人にしか狩れないが、その死神

も人間を殺したことがある怨霊しか狩れない。これはすなわち現状で自分が死神に狩られる心配は無くなったということなのだが、一つ問題がある。

それは自分が目の前にいる死神に『取り憑いてる』ということだ。基本霊は取り憑いた相手を殺すまで他の人間を殺せないという縛りがある。

つまり、

死神 少女：狩れない

+

少女 死神：殺せない

+

少女 他の人間：殺せない

＝死神と少女は離れられない

「……………はあああああ！！！」

あれからお互い喋ることもなく時間は過ぎ、その間に死神は血で汚れた服を着替え、書斎からリビングへと場所を換えていた。

「つまり、どう足掻いてもお前と俺は一緒にいることになった訳だ……………上に掛け合って対処法を考えてもらうが、それまではこの家に住んでもらうしかない！！当然俺の仕事の時は一緒に行動しても

らうからそのつもりで!!」

「……………はあ、騒いでも現状が変わるわけでもないし、解決策が見つかるまでアンタと一緒に住んであげるわよ」

一連のやり取りを思い出しながら、少女は仕方なくといった感じで死神の意見を了承した。

「おお、物分かりが良くて助かるぜ!! ああ、あとアンタはいい加減辞めにしようぜ、一応これでも一ノ瀬いちのせかおる薫かおるって名前があるんだからさ!! お前名前は？」

一度割り切ったら意外と気にしない性格なのか、先程の暗い表情とは全く別の笑顔を向けて、死神……………薫が右手を差し伸べてきた。

「……………死神っていうからもっと難しい名前かと思ったのに、案外普通なのね。境まがひ響こ子こよ」

そう言って少女……………響子は薫の意思に答えるように、差し出された手を固く握りしめた。

その日、死神と幽霊が同居するという、普通では絶対にあり得ない奇妙な共同生活がスタートしたのであった。



## こんなはずじゃなかった（後書き）

ここまで読んで下さりありがとうございます、とりあえず第一話でした（汗）

今回の話は死神と幽霊が主人公&ヒロインってところからも分かる通り、人間との絡みより幽霊とか妖怪なんかの絡みのほうが多いです。

とりあえず今後の予定としては試験官の先輩、他の都市伝説とかで出てくる人（？）達、妖怪をばんばん出していききたいですね！！  
色々その場の勢い的な構成の作りなので、気になる文章や誤字脱字がありましたら知らせていただけると助かります（汗）  
では第二話もよろしくお願ひしますm（――）m

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6527j/>

---

狩る者と狩られる者の事情と憂鬱

2010年10月9日05時14分発行